

「いじめ」その克服の

手掛けかりを求めて

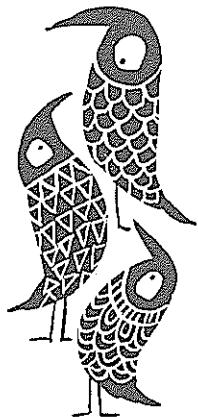
深谷和子氏(東京学芸大学助教授)

五十八年十二月、私はいじめの調査を手掛け、その数字に驚き、もうこの問題は放置できないと感じました。

ただし、気をつけなければならぬのは、人間関係のすべてのトラブルをいじめということで、えてはいけないことです。特に、けんかといじめの区別をつけることが、教育現場で非常に大切なことです。けんかは、子供が成長発達する上で、ぜひ体験した方がよいからです。

その見極めの手掛かりとして、①お互いの力のバランス②継続する期間③何らかの過失があるか――の三点があると思います。

いじめられる理由として、なんとなく生意氣、かんにさわるとかが挙げられますが、だれからもそう思われないようにすることは大変なことです。みんなからよく思われ、味方だけを持つことは不可能です。これが、いじめの恐ろしさなんです。いつ、いじめの標的



にされるかわかりません。自分と違う特徴を持つた子供がいると、まるで自分と同じ種類の人間ではないかのように異端視する。それがいじめのメカニズムではないかと思います。子供たちには、自分がいじめのメカニズムでないかと思いません。子供たちに、自分と違った他人を許せることは、どう対応したらよいのか。仲間を排除するような傾向は起つてこないでしよう。

では、これほど問題になつてゐるいじめを、なぜ子供たちはやめないのでしょうか。

その一つは、いじめられる側にも原因があると、子供たちにいじめを正当化する気持ちがあること

なかつたのではないでしょう。

大事なことは、学校を子供たちの天国にしてやることかも知れませんね。

それでは、実際いじめが起きたときはどう対応したらよいのか。いじめは長続きしません。それは、子供たちにとっておもしろいゲームなんです。

今の子供たちは、一人一人が孤立して、おもしろさがあります。いじめは、子供たちにとっておもしろいゲームなんです。

また、勇気を出して戦えと言ふのも無理です。

先生に相談する以外にもう一つ、親でなければできないことは、いじめられている子を完全に支え、おもしろさだけでなく、仲間と一緒につしょに楽しむことです。自分の仲間と違う資質を持つた人を、排除するような誤った態度を正していくか――を考えていかなればなりません。

そして、両親のほかにもう一人の味方が担任の先生です。両親と先生が支えてやることができれば、いじめ戦争は長くは続かないと思います。しかし、担任として、クラス全体の中で指導力を發揮し、いじめを集団の力学で解消していく手立てを講じるためには、ある程度の時間も必要です。

いじめに速効薬はありません。子供が支えられ、少しでも強くなり、手立てを講じるためには、ある程度の時間も必要です。

先生は、教育の専門家として、母親以上に子供を支える必要性と、その力を持っているはずです。そういうことを考へると、私たちはいじめられているんだと思っていましたら、「自分が弱くてだめだから、いじめられているんだと思っていました」と、理解するでしょう。そのとき、お母さんはもう味方ではないんです。

3

